

編集後記

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) が、2019年12月に中華人民共和国湖北省武漢市で確認されて以降、世界的に感染が拡大し、世界保健機関 (WHO) により2020年1月30日に「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態 (PHEIC)」が、3月11日にはパンデミック (世界的大流行) が宣言されてから、3年の月日が経ちました。

振り返ると、新型コロナウイルス感染拡大は、私たちの日常生活に多くの変化をもたらしました。マスクの着用、リモートワークやオンラインイベントの普及、外出や対面の制限など、最初は違和感を覚えた「新たな生活様式」も、すっかり定着しています。感染拡大については、未だ予断を許されない状況にはあるものの、国や都道府県からの行動制限も緩和され、徐々に日常生活を取り戻しつつあるように感じております。

そのような中、2022年5月に愛媛にて開催された第123回日本医史学会総会・学術大会は、3年ぶりに対面開催が実現いたしました。当会で活躍されている先生方から直接お話をお伺いすることができ、大変勉強させて頂きました。対面の素晴らしさをあらためて痛感した次第です。不安定な情勢の中、開催に踏み切られた実行委員会の先生方におかれましては、ご苦労が多かったことと拝察いたします。大変有意義な機会を頂戴しましたこと、この場をお借りして、心より感謝申し上げます。

一方で、昨今加速するデジタル化により、医史学研究の可能性がさらに広がったということも事実といえるでしょう。具体的には、遠方にて開催される学会や会議の参加、日本全国の機関が所蔵するデジタル資料の活用などが挙げられます。当会でも第121回、第122回学術大会のオンライン開催、ホームページにおける学会誌のバックナンバー公開、投稿規定ではインターネット資料の引用表記を明示するなど、近年における情勢の変化に対応してまいりました。今後の当会発展のためにも、伝統を継承しつつも、多様化に適応する柔軟性を持つことで、より多くの会員の皆様にとって有意義な学会誌をお届けできるよう、微力ながら努めてまいります。引き続きご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。

なお、2023年6月3日(土)～4日(日)に東京・二松学舎大学にて行われる第124回日本医史学会総会・学術大会は、当会初となる対面とオンラインによるハイブリッド形式での開催を予定しております。私も実行委員として、当日は会場にて運営に携わる予定です。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

(加畑 聡子)